

思い出すままに

核データニュース発刊20周年に当って

百田光雄

先日本誌の浅見編集委員長から発刊20周年にあたって何か感想のようなものを書くようにとの御依頼を受けた。そこで大切に保存してある筈の発刊以来の本誌を読み返してみようと思つて、家の中を探したがどうしても見つからない。この20年の間に私は4回の引越しをしたその後遺症なのである。こうしてみると20年は昔流にいえば二昔、決して短い年月ではない。ヴォランティアの集りとして発足したシグマ委員会の活動がこの年月を着実に向上発展してきたことは実に素晴らしいことであつたとシグマのコミュニティの人々はOB達を含めて一いさゝか自画自讃してもよいのではあるまいか。

浅見さんをお願いして参考資料を送っていたゞいて、私は今この雑文を書き始めている。JAERI-M 83-041「1982年核データ研究会報告」に載っている中嶋龍三委員のシグマ委員会20周年記念講演の記事は大変に有益に且面白く拝読した。委員会発足の頃のことは昨日の事のようによく覚えているつもりのものであつたが、結構忘れてしまっていたこともあり、二昔の記憶というものは、実は自分が覚えていることだけで総てが尽されているという錯覚と同居していたのだと痛感したりもした。

閑話休題。私がシグマ委員会の主査をつとめさせていたゞいていたのは1973年(昭和48年)3月までで、1963年2月の発足から10年と1ヶ月のことであつた。中嶋さんの記念講演の中には主査の性格に言及しておられるところが随所にある。該当する年代からみて筆者私に関するものが大部分で、実直で頑固、慎重、真面目すぎて融通性がない、等々。いずれもまことにご尤もで、大いに自覚症状があるところである。むしろ頑固一徹とか、頑冥固陋、石橋を叩いてもなかなか渡らないとか書いて下さった方が実体がよく伝つたかとも思われる。このような次第で委員各位には少なからぬ御不満、御迷惑をおかけしたが、それにもかゝらず寛容に、温かい心で会の発展に惜みない協力をされた委員各位に私は今もお感謝の気持を忘れられない。

シグマ委員会が核データの収集整理を目的の一つとして発足したとき、委員会ではこれを委員会の独力でなしとげることしか考えていなかった。今から考えると不思議に思われるであろうけれど、本気でそのように考えていたのである。しかし具体的な計画が出来ていたわけではない。むしろ見通しは霧の中であつた。委員会が発足してしばらくした頃アメリカコロンビア大学のGoldsteinからCINDAの組織に入らないかという誘いの手紙が来たときは本当に嬉しかった。霧の中から行手が薄く見えてきたという感じだつた。当時のCINDAはCard Indexing

であった。核データの会議の席上でGoldsteinが10cmか15cm程のカードの束を抱えて委員達の間を歩きまわっているのを見たとき、やがてあのカードの束の中にわれわれが送ったカードも加えらる、そしてカード全体が送られてくるとして身内がゾクゾクする気持になったのが思い出される。中嶋さんは記念講演の中でCINDAの trial entry を作ったときの大袈裟な騒ぎを思いおこしておられるが、そうやってスタートした日本のCINDAへの contribution は、文献の coverage は完全、entry の内容も完全という評価を受けることができた。

CINDA加入に前後してIAEAの核データ委員会、ヨーロッパ・アメリカ核データ委員会の活動に参加できるようになって、やがて東西諸国の核データがIAEA、OECDのセンターを通じて自由に入手できるようになった。シグマ委員会が発足にあたって大きな目標としてかゝげた核データの集収はこうして思いもよらぬ早い時期に、理想的な国際協力によって達成されることになった。しかしそれはかなりの部分まで他方本願であった。敗戦国日本にとっては全く幸運としかいゝようなないことだったと私は思っている。

われわれシグマ委員会では発足のときからデータの評価を重要な目標の一つとして evaluation という言葉を頻繁に使っていた。他方物理の分野でははるかに古くから critical review 或は critical table といった言葉があった。Critical の意味を辞書で見ると、“批評(鑑識)眼のある”とか“酷評的な”などが該当するようだ。Critical な review と critical の付かない evaluation - これには私は少なからずまどわされた。Evaluation が critical でなくてよいなどということは全く考えられないからである。測定値のない核データの evaluation は理論計算に頼るより外に途はないが、測定されたデータの evaluation には実験屋の経験が生かされねばならない。中嶋さんが記念講演の中で触れておられるCの全断面積の評価で船を山上に運び上げたのは(p5の中程)、当時あまり振わなかった実験屋の意気を奮い立たせようという私の悲願のあらわれであった。

かつてIAEAのデータ・ユニットがWestcottをリーダーとし、Hannaを有力メンバとして含むグループを作って $2200\text{m}\cdot\text{sec}^{-1}$ 中性子に対するウランの核データの推奨値を発表したのは有名な事である。IAEAの第何回だったかの核データの委員会での作業についての報告が行なわれたときの事と記憶するが、議事がほとんど終り雑題に入りかけたとき、アメリカのHavensが控えめで、独白とも思われる口調で「実は自分がかねてからウランの中性子核データの critical review を行いたいと考えているのだが」と語り始めた。私は一瞬息を呑んだ。IAEAの推奨値といえば非常に権威があるものと思っていたが、Havens から見ると此の度のものは不満であるとも受けられる発言が当事者Westcott, Hannaの面前で行われたからである。その後Havensの critical review が公表されるどころまで進められたかどうか私は知らない。

Criticalなreviewと、criticalのつかないevaluationについて、International Critical Tablesの執筆者の一人でもある中嶋委員の御見解を伺いたいところである。

おわりに、わが「ニュース」はシグマ委員会とともに発展の途を歩んできたが、委員会の舞台裏を支えてこられた方々のなみなみならぬお骨折があったことを忘れることができない。シグマ委員会はよい裏方さんにめぐまれて本当に幸せであったと私は有難く思っている。

(1986年9月18日記)